

石田港驛より黒部鐵道ニ依リ北陸線ニ日市驛ヲ省線ト連絡ス
同鐵道ハ宇奈月温泉迄開通ス

魚津

錨地ノ状況

水深深ク錨地ニ適セス商船ハ陸岸ニ極メテ近ク碇泊シ居トリ良錨
地トハ認メ難シ

入港針路該

魚津燈台ニ向ヒ入港スヘシ

早月川ハ水少ク川筋露出シ遠望顯著ナリ

主要標識

魚津燈台 天神山灯桿 (山頂ニ白熱電燈一個アリ)

上陸場

燈台ノ一側ニ上陸場アリ

翰島泊地

翰島町ハ人口約一萬五千(昭和六年調)町役場、^(郵便局)警察署、工業試

驗場、避病院一等アリ

鋪地ノ状況

鋪地ノ廣袤ハ南北三鍾東西五鍾ニシテ水深三ヨ尋乃至一〇ヨ尋、
 底質泥ヨリ成リ偏北風ニ暴露スルモ東ヨリ南ヲ經テ北西迄ノ風ヲ
 遮蔽シ偏南風時ニハ良好ナル泊地ニシテ大型汽船一隻、碇泊ニ適
 六

入港針路法

市街ノ南方ニ坐すル毛勝山ニ向針シ港口ニ達スヘシ

入港目標

高洲山、毛勝山尖提端燈台（白色塗内筒型不動白光燈）
 三光カ燈キヲ以テ識別容易ナリ）天神山ト、觀音山ト、中間ニ在ル櫓
 型鐵造無線電信柱ニ基

鋪地附近ニ尋思線内ニ漁網アリ整言戒ヲ要ス

上陸場

翰島川川口ニ小艇ヲ達着可能ノ箇所アリ

供給品

清水ハ水質良好ナラス又供給設備ナシ

14

瀧港

米野菜、魚類ハ相當供給スルコトヲ得
輪島築、年産額ハ約六十萬圓ナリ

測候所、茲氣象信號所

國立測候所、茲暴風警報信號所アリ

無線電信所

輪島町、船倉島間ノ一般公衆ニ通信用ニ充ナル為、縣營無線電信所アリ

（無線電話ヲ之取扱フ波長ニムロ米）

防波堤築築工事

大正十一年第一期工事ニ着手、其後第二期工事ヲ附加シ、昭和五年度ヲ

以テ豫定工事ノ全部ヲ終了レ、河口右岸ニ埋立地ヲ新設シ、總工費三

十七萬圓ヲ投セリ

昭和六年四月、偏北強風ニ為、埋立地ヲ始メ、護岸ヲ著シク破損シ、此儘

放置スルトキハ、既設工事ノ大半ヲ風浪ニ犠牲トスルコトトナルヲ以テ、現在應

急工事ヲ施シ、更ニ完全ニ追加工事ヲ實施セント目下計畫中

合計一千五百（昭和五年調）ヲ有スル小漁村ナリ、一ノ宮ニ村役場及三等

5

郵便局アリ海岸ヨリ約二十丁ニ小避病院一アリ浴場及旅館一戸

アリ

本港ハ大正九年以來工費九十五萬円ヲ投シ昭和五年完成セル漁港ニシテ内外
ニ重ク防波堤及一個ノ防砂堤ヨリ成リ吃水一米内外ノ發動機船ノ好避泊
地ナルモ偏西強風時ニ破浪ノ擾入スルコトアリ沿岸漁船ノ利用スルモノ
少カラス

瀬港防波堤ノ南方ハ尋常内底質泥ニ錨泊地ヲ得ヘシ

天候至穩ナルカ北東及東ノ風ノ際ハ錨泊シ得ルモ其他ハ錨泊ニ適セス

主要目標

防波堤端燈台(白塗鐵製格子製表不動白及不動紅燈ヲ点ス)

棧橋

汽艇艇船ハ直ニ防波堤岸壁ニ達着スルコトヲ得

供給品

重油タラシ二個ヲ備ヘ五十七噸ヲ貯藏ス一日重油ニ十噸ヲ供給スルコトヲ得

ト言フ 價格一噸五十圓

「タンク」經營者

羽咋町

北洋商船株式會社

堰井戸數多クアリ水量豊富ナルモ船舶ニ供給設備ナシ

米麥、魚類等若干供給可能ナリ

五、役務人事其他

特務艦ノ名稱ハ之ヲ廢止スルヲ可トス
理由

特務艦ハ軍艦ト異ナリ特殊任務ニ從事スル海軍艦船ナル關係上動モ
スレハ内外ヨリ其ノ乗員ハ特殊取扱ヲ受ケルカ如ク認メラルルコトアリ
乗員ノ思想モ亦斯ル傾向ヲ有スルモノアラシク統率上遺憾ヲ感スル處
尠少ヲラサルニナラス概テ乗員數モ多カラサルモノ多數ニテ斯カル差
別的名稱ニ依リ受ケル思想上ノ惡傾向ヲ一掃シ等シク軍艦
ノ下ニ名稱ヲ統一スル必要アルモノト認ム

六、通信ニ關スル事項

本行動中名ノ入院患者ヲ出シ少数ノ電信員ヲ連日連夜頻繁ナル當直勤務ニ服セシニ拘ラス常ニ士氣旺盛ニシテ圓滑ニ通信連絡ヲ保持シ且長距離受信檢定基準被長測定等ヲ行ヒ其間又教練通信ニ參加シ技術ノ練磨ヲ計リ幾多貴重ナル体験ヲ得タリ

七、機關ニ關スル事項

前後期ニ通シ機關各部ノ收態良好ニシテ一般ニ順調ニ經過セリ但シ九月五日復水器管徑衛帶脱落シ海水漏洩ヲ生スルニ至リ應急處置ヲ講シ免コトアリテ時既ニ測量作業完了後ニシテ行動上影響目スル處尠シナリシハ幸トスルニ處ナリ

本行動中燃料ハ七尾ニ於テ三井物産株式會社代理店ヨリ本省經約夕張塊炭總計四五〇噸ヲ充記ノ通搭載セリ

月	日	搭載量	記
六月	九日	六〇	乗員一般ニ良好ナルモ發煙多ク粉炭一〇〇以上アリシヲ以テ八分自備ニ掛ケ粉炭ヲ除去シタル後解船ニ積卸シ即日搭載セリ 毎一時間ノ搭載量三〇噸乃至一〇〇噸ニシテ左港船舶ノ輻輳スルニキハ勞役人夫不足シ作業能率降下ス
六月	二十日	七〇	
七月	二日	七五	
七月	十一日	三〇	

八月七日	八〇	
〃 二十三日	五〇	
〃 二十九日	五〇	
九月九日	三五	
計	四五〇	

三井物産會社七尾代理店ハ北國石炭株式會社七尾賣炭所ニテ常時貯
炭量多張、幌内中惣炭約一〇〇噸アリ

清水ハ一回伏木ニ於テ補給シタル外主トシテ七尾ニ於テ補給セリ七尾ハ所管ノ
水道水船舶給水設備アリ三十噸及二十五噸積給水船二隻ノ外蒸氣
唧筒附曳船一隻アリ一日ノ給水能力約一五〇噸ナリ給水料ハ給水口ニ於
テ噸ニ付二十五錢港内一漕以内四十五錢其以上一漕ヲ増ス毎二十五錢増
加ス水質ハ良好ニシテ塩分約一七グラムアリ 缶用飲料ニ適ス本行動
中約一〇〇七噸ヲ搭載セリ
伏木港ノ清水ハ水質不良ニシテ缶用飲料共ニ適セス僅ニ雜用水ニ適ス
ルニシ

水質試験成績表ノ如シ

八 醫務衛生ニ關スル事項

前期後期ノ通シ衛生状況良好ニシテ乗員ノ健康状態モ宜シク任務遂行
上支障ヲ來セシ程度ノ患者ノ發生ヲ見ス

前期 自六月十三日(七尾發) 至七月十六日(七尾着)
定員 一四一名

治療患者 一一一名(内平病四、外傷二、性病五)

病名	定員	数	記	事
巨額面粉瘤		一		
急性腸炎		一		
連頭包皮灸		一		
外痔核		一		
右肩峯部打撲傷		一		
左環指小指挫創		一		

地名	外見	臭味	反應	ヤムモニ	亜硝酸	クロール	有機物	硝酸	硫酸	石灰
七尾	無透明	○	中性	○	○	一八	○	○	○	微
伏木	微濁	○	中性	○	○	三八	多	微	微	少

病名	員数	記
急性淋毒性尿道炎	二	五月至七月無病要港部病院ヨリ整快退院 ヲ續キ治療中ノモノナリ
硬性下疳	二	以前ヨリ引續キ治療中ノモノナリ
梅毒第二期	一	以前ヨリ引續キ治療中ノモノナリ
後期	自八月十二日(七尾発)至九月五日(七尾着)	
定員	一四一名	
治療患者	一七名(内平病一〇、外傷三、性病四)	
左 腋 下 結 締 織 炎	一	
左 臀 部 瘡	一	
龜 頭 包 皮 炎	一	
急 性 腸 炎	五	
顔 面 濕 疹	一	
右 胸 膜 炎	一	
右 腕 關 節 捻 挫	一	
右 小 指 挫 創	一	
腰 椎 捻 挫	一	
急性淋毒性尿道炎	二	八月二十七日無病要港部病院ヨリ整快退院 ヲ續キ治療中ノモノナリ

18

軟性下府
ニ
七尾町選部ヲ感染ス

九會計經理ニ關ル事項

(一) 金錢

七尾ニ於テ二回ニケ月分ハ元經費ヲ受領セシムテ其他特記スヘキコトナシ

(二) 物品

被服及需品ハ舞鶴入港ノ際(五月下旬一回・七月下旬一回)同要港部軍需部ヨリ補充セリ

(三) 糧食

野糧品ハ舞鶴ニ於テ搭載セリ

生糧品ハ七尾ニ於テ搭載セル外八月十六日伏木ニ假泊セル際同

地ニ於テ生魚肉三食分・牛肉四食分・生野菜四日分・第一種漬物

八食分・第二種漬物十一食分搭載セリ何レモ品質良好盛

夏ノ候ニモ拍ラス何等ノ事故ナク順調ニ經過セリ

(三) 其他

(一) 酒保物品 日用品

19

一般ニ横須賀舞鶴等ニ比シ高價ナルヲ以テ全部舞鶴入港際積込ミナリ

菓子ハ元説者ト契約シ現品ヲ舞鶴ノ分ト比較セルニ品質良好ニシテ安價ナリシヲ以テ舞鶴ニ於ケル商人ニ之ヲ示シ多大ノ注意ヲ喚起セリ

七尾町塗師町四二

米

田

正

知

(四) 清水

伏木七尾共ニ舞鶴軍需部ト單價契約アリ七尾ニ於ケル清水ハ良質ニテ申分キモ伏木ニ於ケル分ハ其ノ質良好ナラス其成績尤ノ如シ

場所種類	外	状	臭味	反應	アムモニ	亜硝酸	ルクト	糖	硝酸	硫酸	硫酸	石灰
七尾水道水	無色透明	ナシ	ナシ	中性	ナシ	ナシ	二〇	ナシ	ナシ	ナシ		
伏木井水	淡黄褐色	ナシ	ナシ	中性	ナシ	ナシ	三八	少量	微量	微量		少量

(大和軍醫科試験ニ依ル)

(終)

測量經過圖
海圖(四六)同尺度

⑨ 測流海月九

○ 島倉船

⑩ 海流測
六九月

○○ 島ツ七

⑪ 海流測
六九月

島輪

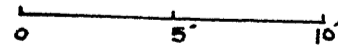
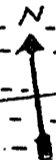
崎剛林

崎音観

六月測量區域

七月測量區域

八月測量區域



0117

8110

期限 關係	保期	3	20	永
	機期	(發期迄)	(完結迄)	永
	機機			

軍務局

海軍大臣

二一號ノ三

昭和六年十一月十日

横須賀

大和街務艦長

海軍大臣 殿

第一課 主任 報告件提出

一 特殊大和街務艦測量任務報告(至十月五日) 一通

(別紙添)

(終)

海

6.11.15

昭和六年十一月 日

特務艦大和津輕海峡測量任務報告(自九月二十二日
至十月二十二日)

訓令三依津輕海峡測量作業別紙實施方案ニ基キ自九月二十

至十月二十二日ノ期間ニ之ヲ實施セリ

一、實施計畫書 別紙方案ノ通

二、行動經過概要

九月二十二日早朝津輕海峡西口到着直ニ測量作業ヲ開始ス九
月二十五日迄連日好晴引續キ同地ニ在リテ晝間ニ於ケル定点觀
測ヲ施行シ二十六日及二十七日大濛ニ於テ炭水補給ヲ行フ二十八日
颶風通過ノ為ニ十九日出港セシカ偏西ノ風浪強大ニテ作業
ハ實施不可能十月二日ヨリ五日朝迄西口ニ於テ晝夜連續測定
点觀測ニ回施行シ同月六日ヨリ十日迄函館ニ在リテ炭水補

給機關手ヲ實施上十日同地發十之日迄主トシテ海峡全般
 流ノ觀測ニ從事事十七十八日兩日函館ニ於テ是水補給ヲ行
 ヒ十九日發ニ三日迄汐首陣定點觀測茲海峡全般流ノ
 觀測ヲ實施ス二十二日頃ヨリ低氣壓近接ニ為降雨トナリ作
 業ヲ打切り同日午後函館ニ入港シ本任務ヲ終了セリ

三、測量ニ關スル事項

(一) 低速艦ヲ潮流強キ水域、測流作業ハ豫想外ニ困難ニシテ尤
 如キ不利ヲ伴フヲ以テ最少限十節ノ速カヲ保持セシムルヲ必要ト認ム
 (二) 定點觀測ニ於テ次回觀測開始位置ニ歸還スル迄ニ長時間ヲ
 要シ(三十分間漂泊シ次回觀測ヲ始ムルニ三時間ヲ要シ尤コトヨリ)
 觀測間隔ヲ延伸シ最強流ヲ觀測スルコト困難ナク不利アリ
 (三) 全般流觀測ニ於テ廣海面ニ多數ノ浮標ヲ投入シ之ヲ追跡
 スル場合浮標ヲ見失フ機會多クミナラス劣速ニ伴フ行動

一區域過少ハ作業能率ヲ害スルコト大ナリ

(二) 夜間、定点観測ニ於テ五〇〇燭光ノ電燈ヲ他ノ燈火ト識別容易ナル如ク高所ニ裝備且測角ニ適スル如ク設備且セハ艦上ニ於テ十哩内外ノ距離ニ在リテモ位置ヲ得ルコト困難ニアラズ

此ノ方法、作業簡單ニシテ實施亦容易ナリ精度又良好ナリ

(三) 夜間、定点観測ニ於テ陸上ニ経緯儀ヲ据付ケ艦ノ方位ヲ測定スル方法ハ遠距離ニ隔在セル陸上測角係該艦通信連絡極メテ困難ニシテ作業容易ナラズ時間喰違ヒハ観測成果ヲ全ク無効トスルヲ以テ同時観測ニ關スル手段ハ萬全シ期スルヲ要ス

本艦ノ如キ探照燈ノ設備旧式ニシテ光力微弱ナルモノニ於テハ此ノ方法ハ適當ナラス

(四) 全般流ノ観測ニ於テハ潮時ニ依リ潮流ニ強弱アリ潮流ノ強弱ニ依リ主流及還流ノ流向該流域異ナルヲ以テ此ノ点豫メ注意シ

置クヲ西ヌ

本艦、此キ低速艦ニ於テハ主流ト還流ト同時ニ觀測スルハ困難ナルモノ

ト認ム

(五) 今回施行セル流測作業ニ依リ知リ得タル事項概ネ左ノ如シ

(イ) 定点觀測

秋季全般ニ亘リ低々潮、後三時ヲ最強トシ高々潮、後三時ヲ最弱時

トシ高低潮ノ際ハ流勢少シク強クナル傾向アルモ顯著ナラス低高

潮場合ハ其ノ流勢弱キト向クモ尚ホ著シキ流速ノ低下ヲ見ズ然レ

テ本艦測得セル最速流速西東七測点ニ於テ東北東五節、最弱北西流、八

節ナリ 別圖參照

(四) 全般流觀測

別圖

(ハ) 表面海水温度

主流流域ハ殆ト一樣ニ十九度附近ニシテ西口ハ東口ヨリ温度高シ

距岸一哩附近ハ沿岸水ト認めラルモ、アリ海峡、南側ハ北側ヨリ温度高シ

(五) 表面海水比重

主流區域、比重ハ〇.〇〇二五附近、沿岸水ハ海峡北側ハ南側ヨリ比重大ナリ

(六) 交通船舶頻繁ナル海峡内ニ於テモ月明、夜間ニ在リテハ昼間ト同様

ニ此ニ懸念ナリ測量作業ヲ實施スルコトヲ得タリ但シ艦外見張ニ對シテハ充分ナル注意ト配員ニシテ顧慮スルヲ必要トス

(七) 測流浮標ハ十米以上ノ風アル場合ハ毎三十分間ニ附着、識別旗ノ形状及其有無ニ依リ、面米乃至一五〇米位ノ差違ヲ生スルヲ實驗セリ故ニ風速ノ測流浮標ニ及ホス影響ヲ付テハ相當留意スルヲ必要ト認め

夜間用、測流浮標ハ耐風洋燈ヲ附着シテ使用セシカ先カ相當強ク
 好結果ヲ得タリ尚竹竿ノ頂部ニ石油ヲ充テ「カンテラ」油燈ヲ假製
 シ海眞驗セシカ風力ニ對スル耐久カハ良好ナリシモ概ネニ五分内外ニ
 テ消燈セリ

測流浮標ハ旗色ノ配合ニ依リ可成異種ノ色彩ヲ多數取交セ
 見其ノ識別ヲ容易ナラシムルハ勿論トスル處ナレモ今回ハ紅白ニ色ノミ
 ナリシ故組合セ、變化ニ乏シク識別上多大ノ不便ヲ感シタリ

海上波浪アリテ白浪凡場合ニハ白旗ハ見エ具合宜シカラス又海面
 薄暗キ場合ニハ紅旗ハ遠望稍困難ナリ黃色ハ凡テハ收況ニ取
 テ無難ノ色彩ナルヲ以テ此等紅白黃三色ヲ縦又ハ横或ハ交互ニ
 縫合スルトキハ各旗共ニ異ナリク多數ノ組合セヲ得ヘキヨ以テ旗色
 シ見テ直ニ其ノ投入時目ト位直ヲ確知スルヲ得作業進捗上頗ル
 便利ナリト思考ス

改流^流艦ハ風向如何ニ關セス大形旗流ヨリ識別容易トモト認ム

五、教育訓練

今次行動八年度作業最終期ニ當リ乘員一員ノ技術最高点ニ達シタルヲ以テ最初ヨリ頗ル順潮ニ寄負施スルコトヲ得タリ

本年度ハ准士官以上茲下士官ニテ測量ニ對シ經驗ヲ有スル者多數アリタルヲ以テ測量艦トシテ任務遂行上好都合ナリシモ今後異動又ハ補充交代ニ依リ經驗者ヲ轉出セシムル場合ハ基幹タル下士官ノ經驗者ノ殘留ヲ必要ト認ム

測量艦ニ機關檢定ヲ課スルヲ可ナリト認ム

理由

測量艦機關ノ使用及操縦ハ一般艦船ヨリモ敏系雜長時間ニ亙ルヲ常トス而シテ測量艦ニ於ケル機關ノ操縦ノ適否ハ實ニ測量作業能率ニ影響自スル上甚大ナリトス測量艦ニ於ケル測量作業ハ一般艦船ノ戰

闘作業ト同様ニシテ乗員一同全能力ヲ與ケテ從事スル作業ナルヲ思
ヘ本檢定ニ實施ハ必要ナルモノト思考ス

六 役務人事

任務終了後役務変更ノ際第一豫備特務艦トシ全定員ヲ置カレン
コトヲ切ニ希望ス本艦ノ如ク老齡艦ニシテ固有定員尠キモノニ在リテ
ハ特ニ然リトス是就役出動中ハ主要任務作業ノ為悉ント全カシ
舉ケテ之ニ從事シ船体兵器機關保存等モ完全ニスルコト極メテ困
難ナル状況ニ在リ又任務終了後ハ第一豫備特務艦トナリ第一特
別定員ヲハ所要役員ヲ除クトキ保存整備ニ充當シ得ヘキ人員
僅カニ水兵員、機關員ヲ併セテ十名内外ニシテ然モ此ノ期間ニ於テ逐年度
ノ役務ニ應スヘク諸般ノ整正備ヲセサルヘカラサルモ艦ハ年々老齡衰朽
ノ度ヲ増シツアルハ年々少クザル處ニシテ第一特別定員人員ノ不足ハ
不足ヲ感シ結局就役前定員増加サル際ニ至リテ着手シ出動ノ

開際迄混雑せしルノ由ナキニスル

七、船体兵器艦装用品ニ關スル事項

各部甚老朽度ヲ増スヲ以テ微細ナル点ニ至テ深甚ニ注意シ拂ヒ保存
整備ヲ行ヒタリ

(一) 冷蔵庫ノ防熱装置ヲ完備スルコト

冷蔵庫ノ防熱装置不具合ニシテ且冷却機ノ整備ナキ為生糧品ノ貯
藏困難ナルヲ以テ毎年豫算外トシテ生糧品冷却用氷ノ直接購買費
一、二〇圓内外ヲ上申上配付ヲ受ケウアルモ盛夏ノ候ニハ生糧品ハ
漸ク四、五日ヲ保チ得ルノミナルヲ以テ防熱装置ヲ完備スルトキ氷
ノ購買量著シク減少シ且生糧品ノ保存期間ヲ延長スルニナラ
ズ乗員保健上必要事項ト認ム

(二) 清水缶ノ増設

石灰搭載量比清水搭載量少ク行動日数モ之カ為制限セラルル

コト夥シキヨ以テ差當面リ帆布製洗濯槽四個乃至六個ヲ借用シ其他日
火鑪迄、假木製水缶ヲ借用使用中ナルモ此等假設物ヲ上甲板ニ
置クトキハ作業上不便大ナルミナラス 動搖大ナル際ニハ槽外ニ溢水シ海
水ノ飛沫ノ混入等爲金水飲料水ニ適セサルニ至ルコトアリ又荒天
ノ場合ニハ假設水槽ノ固縛ニ付格段ノ留意ヲ必要トス收改ニアリ
此ノ際清水缶ヲ増設スルヲ最良ノ策トス

(三) 増掲燈増備ノ件

測量作業ハ夜間、行動ヲ必要トスルニ頻繁ナリ 行會船舶ニ對シ
自艦ノ針路ヲ先ツ汽燈及増掲燈ニ依リ他艦ニ認識セシムルハ衝
突豫防上必要事項ナリトス 然ルニ本艦ニ増掲燈ノ裝備ナキヲ以
テ之カ増備ヲ西女スルモノト認ム

(四) 探照燈ノ現狀

本艦現用ニテノ探照燈ハ規程電壓八十ボルトニテ發電機

八 航海ニ關スル事項

モ同電壓ナルモ發電機ニ到ル蒸氣管徑過小ナル為蒸氣流量不足
 シ發電機ノ全能力發揮困難ニシテ發生電壓六五「ボルト」乃至
 七十「ボルト」ニ過キス之カ為探照燈ノ光力モ從テ弱ク夜間作業
 等ニ際シ不便ヲ感スルコト大ナリ故ニ補助機械ニ到ル蒸氣管系ハ
 根本的ニ改造スル必要アルモト認ム

(一) 津輕海峡ノ航路法

(イ) 東北方ヨリ函館ニ到ル

惠山「イ」島、汐首ヲ一哩 $\frac{1}{2}$ 離シテ迴航函館半島ノ南一哩ニ到ル

此航路上ニ於テ弱流時ニ稍反流ヲ利用シ得ベク強流時ニ相當逆
 流ヲ豫期セサルヘカラス

(ロ) 東口南方ヨリ函館ニ到ル

尻矢埼ノ北方四哩ヨリ大間岬燈台ニ向針燒山埼北方ヨリ函館山

ニ向針ス此、航路上焼山埼北方迄ハ反流ヲ利用シ得ベク海峡橋断
中ハ東偏甚シ速ニ主流ヲ橋断シ北海道側ニ達スルヲ得策トス

(八) 東口南方ヨリ陸奥海湾ニ到ル

尻矢埼北方四理ヨリ大間埼燈台ニ向針焼山埼ノ北方ヨリ函館山
ニ向針大間埼燈台北方ニ到ル南ハ〇度西ニテ主流ト併行シテ進
ミ大間埼燈台ノ北西方ニ到ル山神山ト袴腰山ト連結線ト南ニ一度
西ニ航スベシ大作山ノ西方ヨリ平館海峡ノ中央ヲ針路南ニ進ムヘシ
尻矢埼北方ヨリ大間埼東方迄ハ反流ヲ利用シ得ベク大間埼附近ハ最
強キ偏東流ヲ受クシ大間埼ノ西方ヨリハ弱流時ニハ反流ヲ利用シ得ベク
強流時ニハ偏東流ノ影響ヲ受ケ位置東偏ニ注意スルヲ要ス

(三) 函館ヨリ東口北方ニ到ル

函館半島南方ヨリ主流ニ近ク航路ヲ選ビ距岸ニ湊附近ヲ航スベシ

(ホ) 函館ヨリ東口南方ニ到ル

6

函館半島南方ヨリ尻矢崎ノ北方ニ直航スヘシ汐首附近ヨリ主流、
影郷首受ケ位置北偏々過度ニ尻矢崎ニ近接セサルヲ得策トス

(八) 陸奥海灣ヨリ東口南方ニ到ル

平館海峡ノ中央ヨリ北航シ反流區域ヲ脱シ後北三八度東ニテ小神山
ニ向針大間崎ノ北西方ヲ汐首辨天島間中央ヨリ少シク南方ヲ經テ
尻矢崎ノ北方ニ向フヘシ

(九) 西口北方ヨリ函館ニ到ル

白神崎矢越岬ヨリ三湊離シテ廻航函館港防波堤燈台ノ北方ニ向
フヘシ

(十) 西口南方ヨリ函館ニ到ル

龍龜岬ノ北方ヨリ函館山ニ向針葛登支岬ノ南方ヨリ防波堤燈台ノ北
方ニ向フベシ

(十一) 西口南方ヨリ陸奥海灣ニ到ル

龍飛崎北方ヨリ小荒川ニ向針、明神崎ヲ充分瞭リタル後平館海峡

ノ中央ヲ南行スヘシ

(又) 函館ヨリ西口北方ニ到ル

(小) 逆航路ヲ(ト)ヨリ陸岸近ク航スベシ

(ル) 函館ヨリ西口南方ニ到ル

(又) 航路ヲトリ白神崎南方ニ到リ其ヨリ南航スヘシ

(ワ) 陸奥海湾ヨリ西口南方ニ到ル

(リ) 逆航路ヲ陸岸ニ近ク航スベシ

(三) 福島錨地

西ヨリ北ノ風ヲ遮蔽シ冬季避泊ニ適ス但底質硬沙泥ニシテ錨搔
キ良好ナラス福島錨地ノ入港目標ハ前千軒岳及天山ヲ可トス村落ノ
東方神社ノ森ハ顯著ナリ入港スル場合ハ神社ノ森ヲ北四十度西ニ向首
シ丸山云々セノ方位ヲ水深十二米ノ沙底ノ處ニ投錨スヘシ

村ノ南側海岸ニ棧橋アリ

秋季刻ヨリ夜間ニ互^{柔魚}リ漁船錨地沖ニ群集シ夜間ノ入港ニ注意ヲ要ス

福島村ニ於テハ船入濶築設ニ關スル工事計畫確定ニ近ク着工ノ豫定

修築計畫書

福島村前面發動機船八十隻ヲ繫留スル水面積一四、〇〇〇平方米ヲ防波

堤ニ圍繞シ外ニ漁獲物揚卸及理場トシテハ二四〇坪ノ埋立地ヲ構

築ス

總經費

二十五萬圓

竣工豫定

着工後三年後

(三) 涌元錨地

南西ヨリ北西迄ノ風ヲ遮リ偏西強風ノトキハ良キ避泊地ナリ

知内南方著樹園(海園)ニ號ニ記載シ針路西ヲ向首水深十米ノ

處ニ投錨スヘシ

(四) 葛登支岬東方錨地

距岸一理附近漁網ヲ碇置シテ夜間入港警戒ヲ要ス

(五) 三股錨地

東ヨリ南ヲ經テ西ニ到ル風ヲ遠ル今別沖十八米底質砂ノ上處ヲ可トス

入港スル場合ニ今別村ノ中央ニ向首増川ノ製衣材所煙突ノ方位ニテ投錨

スベシ

(六) 函館港

函館港ニ於テハ西風ニ對シ警戒戒ヲ要ス故ニ防波堤ヲ西ニ見ル線以南

ニ碇泊スルヲ安全トス港内秋季ヨリ春季ニ至リ錨船多ク錨場ヲ得ルニ

苦シムトアリ青函連絡船航路ハ常時碇泊船舶ナキヲ以テ誤ラテ投錨

スベカラズ

入港後防波堤燈台約五〇〇米離シテ廻リ港内ニ入ル内方錨地ニ就

クニハ連絡船航路即チ港内挂燈浮標ヲ接航シ適當ナル錨地ヲ求メテ

投錨スルヲ安全且最簡ナル良法トス然レテ入港船ハ防波堤燈台ヲ大廻リ出港船ハ同燈台ヲ小廻リニスルヲ可トス連絡船之ヲ每隻施シツツアリ

港内目標

測候所 暴風 敬言 報

棧橋 停車場ノ赤屋根 著屋

カネモリ
一 森百負 在ノ黄塗 著屋 夜間ハ塔ノ頂ニ白燈三個ノ上下ニ連揚ス 高サ著シク高キヲ以テ識別容易ナリ

會堂ノ白色 著塔

函館高等女學校校舍ノ著屋

函館山ノ高龍寺山

船渠會社大煙突

(七) 海峡附近ノ夜間ハ漁船ニ就キ

津輕海峽沿岸附近ハ夏季ヨリ初冬ニ至リ夜間柔魚釣漁船出漁
 シ海峽内延々十數哩ニ亙リ數百千ノ漁火點綴シ不夜城ノ觀ヲ呈シ
 一大偉觀ヲ現出ス

此等漁船ハ大部分發動機船ニシテ大サ三十噸内外アリ櫓又ハ帆ニ
 ニテ運行スル川崎船モ多少混濁ス何レモ航海諸燈ヲ点スルモノ稀
 多漁況及風向ニ應シ海峽内隨所ニ群集スルヲ見ルハ函館半
 島數哩沖ヨリ矢越福島及福小沖ハ最モ好漁場ニシテ本流ト
 反流トノ境界線附近ニ出漁スルコト多シ

夜間海峽ヲ横断スル場合ニハ航海上支障ヲナシ一度ハ漁火ノ群ニ入
 ルトキ眩々スル漁火ヲ為眩惑作用ヲ受スルコト可成之ヲ避クルコトス
 漁季ハ七月申下旬又ハ八月上旬ヨリ十二月下旬ニ及ヒ十月ノ最盛季ト
 シ漁季中北陸沿岸地方秋田山形沿岸ノ漁船モ出漁ニ來ル由

九、通信ニ關スル事項

夜間測量中福島の假設電信所ヲ設置シ本艦ト通信連絡ヲ計リ
 以テ移動無線電信機ヲ取扱ニ習熟セシムコトヲ得タリ
 一、機關關スル事項

今功行動中ハ主機械高低圧曲脈裏金各一回輕度擦熱ヲ生シル
 外各部ハ收能ハ良好ニテ特ニ函館發歸港ニ於テハ連日連夜遂強
 風浪ニ遭ヒ空轉等為甚ニ難航ヲ續ケルモ幸無事ナルヲ得タリ
 本行動中搭載セル燃料尤ノ如シ

月日	數量(瓶)	場所	記
九一五	七〇	舞鶴	函館ニ於テハ三菱精糖株式會社ヨリ美國炭 子搭載セル該炭ハ粉炭無ク安固ヤ良好ニテ 積焼マ塞クク張炭ニ比シ測量船同トシテ適 良ナリ
九一六	六〇	大湊	
一〇一七	八〇	函館	
一〇一八	五〇	函館	

函館清水ハ水質良好ニテ金用飲用ニ適シ價格瓶ニ付五十五錢總額

三一 一 艦搭載セリ

本艦機關ハ全ク良好ニシテ主機械ヲ始メトシ補助機械諸機モ固シク
 衰朽摩耗ニ整理操縦上 甚クシクサル困難ヲ感シツアル上 廢ナルモ乘員
 終始一貫セル細心ノ注意ト多大ノ努力ニ依リ故障モ甚ク極メテ良好
 成績ヲ以テ本年度任務ヲ完了セリ

一 醫務衛生ニ關スル事項

期間 自九月二十三日 至十月二十三日

定員 一四一名(内一名結核性腹膜炎ヲ大湊要港部病院ニ在院)
 受療患者 一三名(内平病六名性病五名、外傷二名)

病名	員數	記	事
右胸膜炎	一		
外痔核	一		
急性腸炎	一		

10

三、會計經理ニ關スル事項

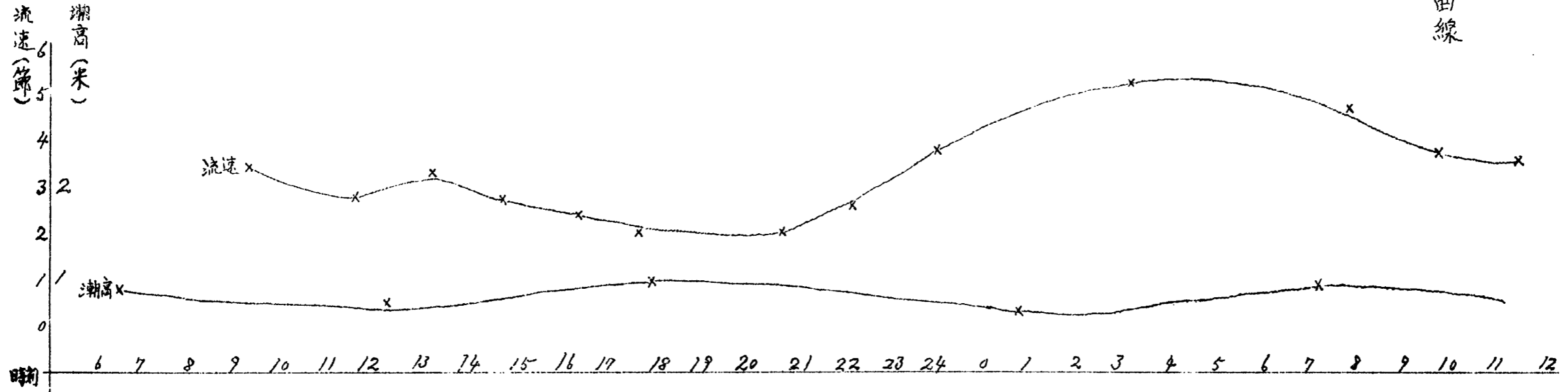
本作業中大漢及函館ニ於テ生産糧品ヲ受入レシカニ函館ニ於ケル
生野菜ハ品質良好ナルヲ認ム

月例身體検査 十月二十日ニ施行セルモ患者ナシ

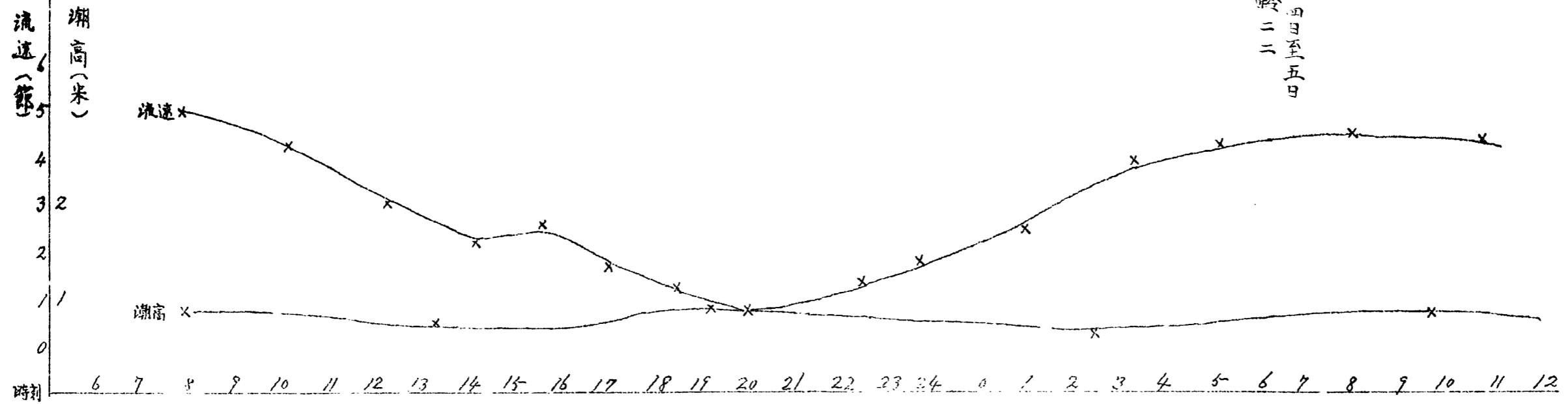
頭部挫創	一	
左膝關節部挫傷	一	
黴毒第二期	一	
橫痃	二	
急性痲毒性尿道炎	二	
副睾炎	二	
結核性腹膜炎	一	九月廿九日大漢要港部病院ニ入院

別圖
湖高湖流曲線

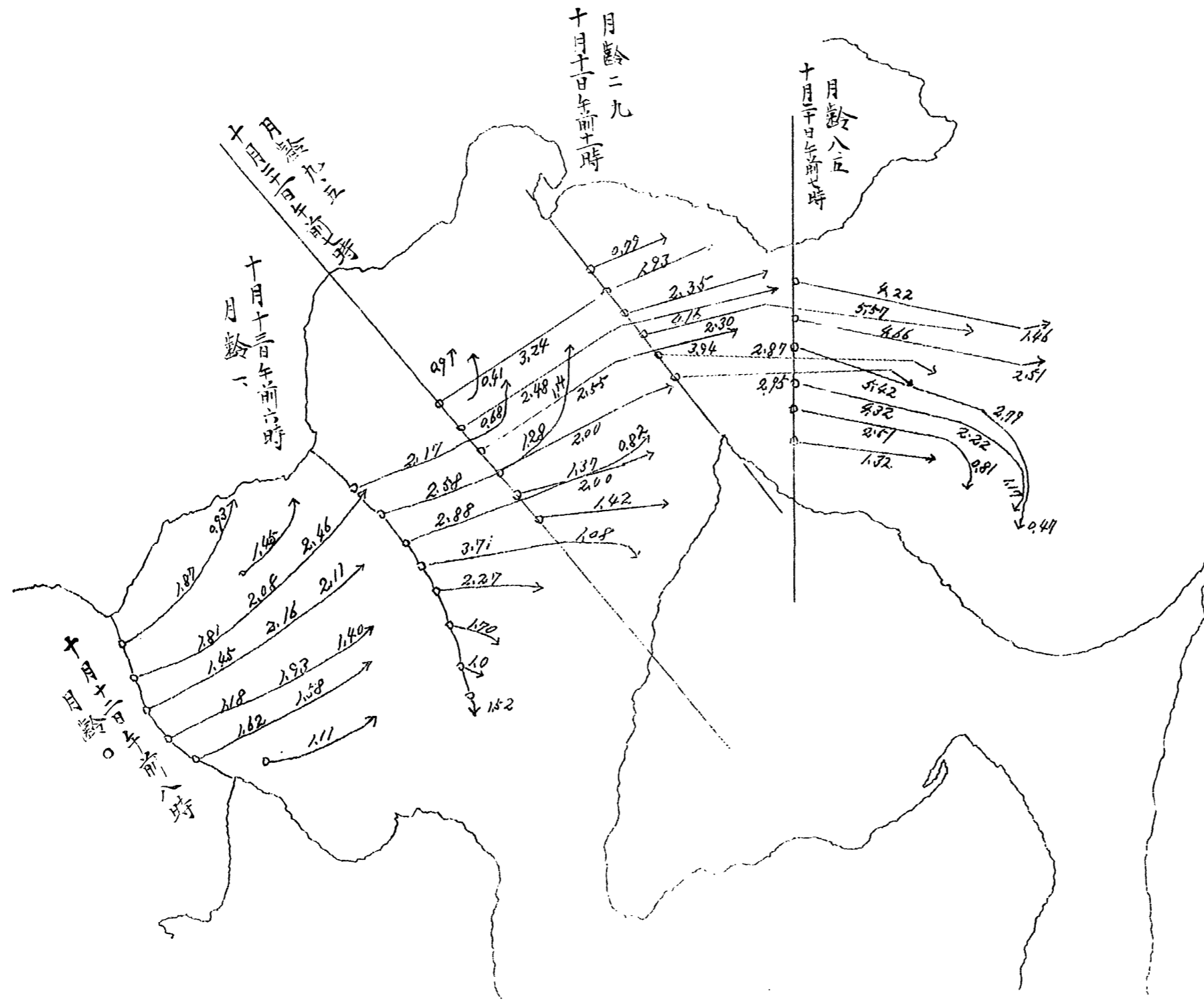
十月二日至三日
月齡二〇



十月四日至五日
月齡二二



0140



今般流流向流速

別圖

(13)

0141

一、守貞施豫定

昭和六年秋季津輕海峡潮流測定實施方案

大和特務艦長 野澤 錦二

至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	期
十九日	十七日	十五日	十一日	十一日	五、八日	二十八日	二十八日	二十九日	二十九日	二十九日	閏
	小	大	大		大、小			大			潮齡
函館	龍飛 10.7 測点	望首 10.6 測点	海峡全般	函館	龍飛 10.7 測点	大湊		龍飛 10.7 測点			場所
機關整備	定点觀測	定点觀測	表面流観測	機關整備	定点觀測	機關整備		定点觀測			作業
	同	驗流水温及比重測定	浮標追跡		定 驗流水温及比重測定			定 驗流水温及比重測定			觀測事項
	右										

自十月十九日
至 二十五日

小 致首 10.6 測点

定点観測

水温及比重測定

備考 気象観測は毎日毎時行フモノトス

二、観測方法

(一) 定点観測

上記方法ニ依リ表面及中層驗流採水並水温測定ヲ同時ニ施行ス

一組ノ観測所要時間ヲ約三十分トシ約一時間半ノ時隔ヲ以テ同一一定点

ニ於テ晝夜出来得ル限リ長時間ニ亘リテ反覆施行ス

(二) 表面驗流

二個ノ竹浮標ヲ流向ニ直角ニ約十米ノ間隔ヲ保チテ定点前方ニ投

入ス艦ハ其ノ中間ニ停止シ約三十分間毎五分時(流勢微弱場合)

毎十分時ノ各浮標位置ヲ測定シ以テ浮標流向流速ヲ算出ス

(三) 中層驗流

驗流深度ハ二十五米、五十米、百米ノ三種トシ表面驗流中(約三十

今聞ニ「エカマン」驗流器ヲ以テ各深度ニ付キ一回宛測定ス

(1) 採氷及水温測定

採氷ハ驗流時ニ表面ニ于テ五米、五十米、百米、海底各深度ニ於テ夫々一回宛施行シ水温測定後之ヲ貯藏シ旋泊中比重ヲ測定ス

(2) 夜間觀測

白神沖ニ於ケル夜間觀測ハ夜間觀測用浮標一個ヲ使用シ晝間ニ於ケルト同一要領ニ依リ施行ス但シ艦位測定用トシテ福島附近ニ大燈火(五〇〇燭光電燈)ヲ水路部ニ設備シ位置ヲ決定シ置ス

艦位ハ別ニ八項ニ依リ水路部部員ヲ派遣シ白神及福島附近ニ於ケル經緯儀ヲ据テ艦ヨリノ信號(探照燈)ニ從ヒ同時測角ヲ行ヒ艦位ヲ決定ス

(三) 海峽全般ニ互ニ表面駿流

早朝海峽西口ニ縱線(白神龍飛ノ一線)上ニ約三千五百米ノ間
隔ヲ以テ五個乃至七個ノ竹浮標ヲ投入シ順次ニ之ヲ追跡シテ夕刻
迄各浮標位ヲ連測シ翌日日本流區域ニ於テ大体前日ノ續測キ
トナルヘキ線上ニ三度ニ數個ノ浮標ヲ投入シ前日ト同様ノ追跡測定ヲ
ナシスルヲ浮標海峽ノ東口ヲ流出スルニ至リテ止ム

(四) 海峽全般ニ互ニ表面水温及比重測定

津輕海峽方面ニ出動中毎三十分及附圖ニ示ス地點附近ニ至リ毎時
適宜採水ニ水温測定後碇泊中ニ比重測定ヲ行フ

(五) 氣象觀測

毎時氣温、氣壓、風向、風速、天氣、該海面模様ヲ觀測ス

三、作業ノ分擔

航海長ハ艦位ノ測定記註ヲ行ヒ其他作業ノ全般ヲ管理ス

航海士六航海士に補佐ス

當直將校ハ艦外見張操艦及日課週課ノ旅行ニ任シ兼テ航海長
ノ指示ニ依リ驗流浮標ノ方位距離茲必要ナル諸要素ヲ記録係
ニ通報ス

測量班ハ驗流採水及驗流浮標ノ準備入方ニ從事ス

信號兵ハ輪番一名記録ノ記註ニ從事シ尚時計係ヲ兼務ス

測距手ハ驗流浮標ノ距離ヲ測定ス

四、陸上派遣員ト、規約信號

一、探照燈ヲ以テ記規約信號ヲ行フ

本艦測量準備完成セバ探照燈ヲ点ス点燈ニ分ク後探照燈

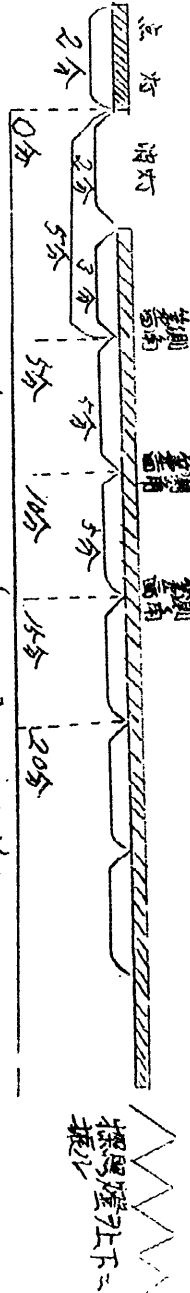
ヲ消ス探照燈消燈時時計ヲ發動ス即チ此ノ時ヲ零時零分零

秒トシテ時ヲ計算ス

消燈ニ分ク後再び探照燈ヲ点ス探照燈点燈後五分ニテ第

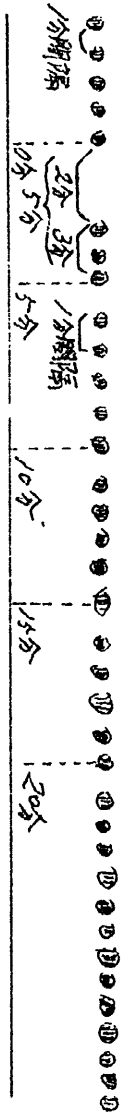
一回測角ヲ行フル後 測量中止次回ノ測量ニ移ルルノ信號ヲ行フ迄五分間隔ニ測角ヲ行フモトス

本艦測量ヲ中止シ次回ノ測量準備ニ移ルル時ハ探照燈ヲ上下ニ振ル



其ノ自ノ測量ヲ止ムル時ハ探照燈ヲ左右ニ振ル

二、探照燈故障ノ場合ハ發光信號燈ヲ使用ス其ノ方法左ノ如シ



三、陸上ト本艦ト間ニ異動無線電信機ヲ使用ス其ノ要領ハ別紙
方案ノ通り

五、時辰整正合

夜間作業ヲ日ハ本艦ト陸上ト間ニ於テ夜間作業開始前午後六

時、午後之時三十分午後七時中適宜一回時辰ヲ整合ス
 探照燈ヲ上下ニ振ル 時辰整合用意

探照燈ヲ消燈時ヲ以テ時刻ヲ校正ス

六、福島村経緯儀測角点ニ移動無線電信機ヲ以テ無線電信所ノ假
 設ニ本艦及陸上班トノ通信連絡ニ任セシム

呼出符號 D R.

派遣員 兵曹、水兵各一、機關兵一

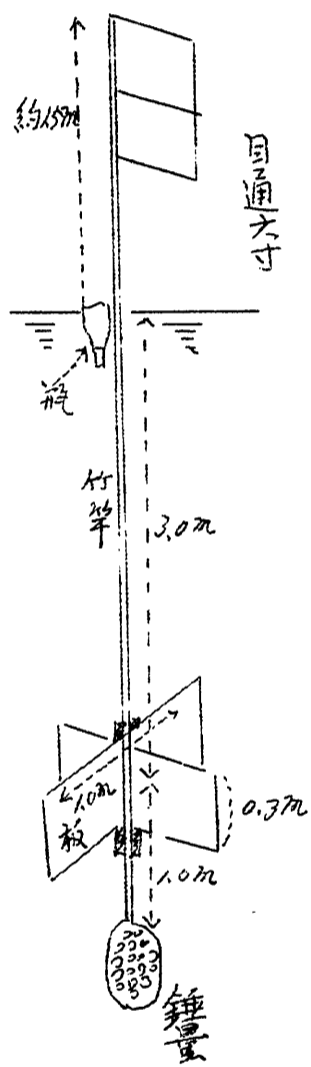
七、浮標様式

(別圖一葉添)

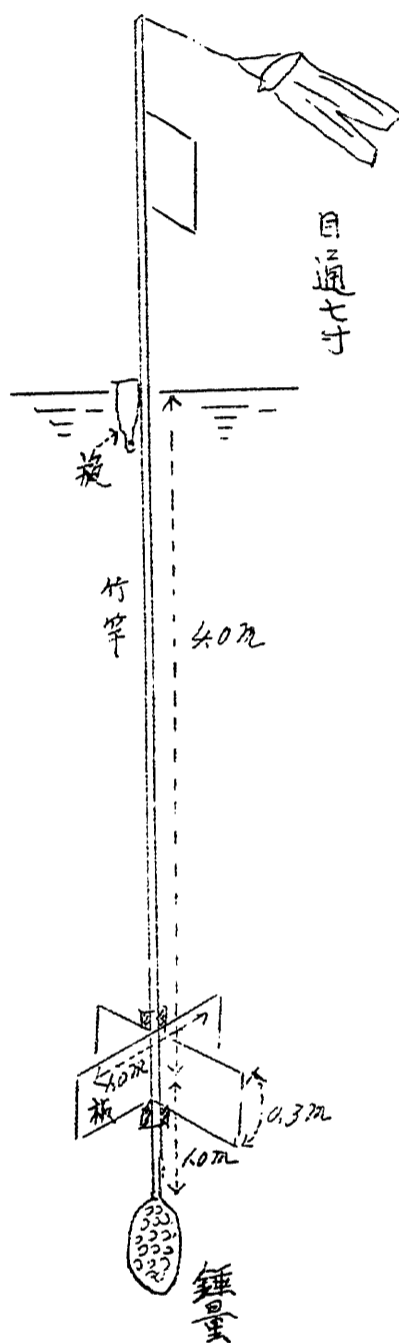
(終)

(浮標)

定点検流用



海峡全般検流用(約十五個)



0150

保期	3	20	永
換期	()	()	永

駒橋機密第3号

昭和六年五月一日横須賀

官房受

五月四日

高木

駒橋艦長

第二課 海軍大臣 啓

報告書類、件提出

一 昭和六年四月 駒橋行動報告

一通

一 伊豆諸島方面海洋観測報告

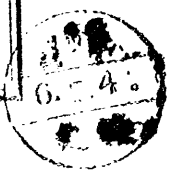
一通

(別紙添)

終

海

軍



昭和六年軍艦駒橋第一次海洋測量報告

一任務中、行動作業概況

四月二十三日午後一時横須賀出港二十四日午前六時
測量地着採水ヲ行フ荒天ノ北アリタルヲ以テ二十五日
清水ニ歸シ泊清水(並水不高)搭載後午後五時出港
二十六日午前六時ニ線北端ニ達シ駿流浮標九枚
投入海流測定從事二十七日正午作業終了此
間採水ニ回銚測及駿流儀ニ依ル海流測定各一回
ヲ施行ス

炭水ヨリ行動目数ヲ制限セラルノ懼アリ線定計画ヲ
變更シ浮標投入ニシテ海流測定ニシテ取リ止メ二十七
日採水一回二十八日採水及駿流各一回二十九日採水
ニ回駿流一回ヲ施行シ三十日荒天ノ為メ作業不可

海 軍

能ナリレヲ以テ同日午後六時横須賀ニ入港セリ

二測量成果一覽表 別表

三水路部供給品ノ消耗及残存高

駿流浮標九個「カスビ」式測深儀鉅量一個消耗其他

全部残存

四測深儀ノ現状

右舷裝備「カスビ」式測深儀用カビットノ舷外張出量

過少ノ為駿流儀使用不便ナルノミナラス排水作業等

ニ際シ艦橋標縦上不便甚ク修理ヲ要ス其他ハ

完備ス

五所見

船員皆測量無経験者ニテ且測量器具搭載

後直ニ出港セルヲ以テ之カ取扱ニ慣熟スルノ暇ヲ作業

<p>ニ稍(尋)緩シタルノ感ハアリシニ 觀測ハ確實ヲ旨トシ水 路部ニ負指道ナリ下ニ充分具 ノ方法ヲ會得シ測定 値ハ信ヲ置クニ足ルモノト認ム</p> <p>(終)</p>					
--	--	--	--	--	--

母

同

別表

測量成果一覽表

測量艦成績表

測量	洋海	軍艦種類
	伊五諸島測量	方面
一	伊五諸島測量	個數
		海面方里
二十七日	自四月二十日 至四月三十日	始終月日
正午	七日五時間	從業日數

艦名 軍艦 駒橋
 艦長 海軍中佐 能美留壽
 航海長 海軍大尉 山香哲雄

二	一	九	八	七	六	五	四	三	二	一	日
土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	曜
穩雨	和曇	後晴	和半晴	曇	後晴	半晴	後晴	和晴	和半晴	和半晴	天氣海上 模稜
早瀬	吳一番浮標	一五理	合右	合右	合右	合右	合右	合右	合右	合右	正午位置 佐世保 五番浮標
午前土時吳出港三原瀬戸東口仮泊	石炭搭載	保存手入	午後三時横須賀三向ヶ佐世保發	測深儀公試爲港外出動	自差修正及測深儀公試爲港外出動	休業	大掃除機関手入	神武天皇祭遙拝式休業	船体機関手入	在役兼教習備艦下定メール 内艇塗粧機関手入	記事

昭和六年四月駒橋行動報告

毎 日